

## 教育、研究および実践の統合

沖縄県立看護大学大学院保健看護学研究科

金城 芳秀

大学・大学院（以下、組織）の目的は社会が期待する人材の育成によって貢献することである。組織は自己点検評価を行い、「教育課程の質」を改善するとともに、その取り組み過程については、外部評価（認証評価）などを通して社会に対する説明責任を定期的に果たすことが義務付けられている。組織の目的を達成するには、組織全体で主体的に行動することが求められている。そして自助努力を継続的に行う組織には、文部科学省が提供する競争的外部資金（COE、GP など）の獲得機会が多くなっている。すなわち大学間競争のシステム化が推進される中、生き残りの鍵は組織の目的の明確化と共有化であろう。このような組織の持続的発展を大前提に、大学人一人ひとりには意識改革が求められている。しかし、組織の大事が個人の大事とは簡単にいかないことから、そこに「やらされ感」からの救出作戦（戦略）が必要ではないだろうか。ここで考えたい戦略の一つが教育、研究および実践の統合である。統合には、組織レベルと個人レベルでの統合があるが、ここでは個人から全体をみてみたい。

さて、わが大学および大学院では、保健看護を次のように定義している。保健看護（Health and Nursing）とは、広く個人、集団（家族、学校、地域、国など）を対象とし、健康現象を生活との関連で文化的枠組みの中でとらえ看護的支援を行うことである。ナイチンゲールは、病気は暮らしのありようの中から生まれ、また暮らしのありようによって癒されていくものと捉え、自然の癒しのプロセスがさまざまげられないよう、暮らしをととのえることが看護の目的・役割としている。すなわち看護的支援とは、ヘルスプロモーションのエンパワメントにつながると理解できる。一般的に支援には、自助、共助および公助がある。まず、

自助を引き出すには個人のモチベーションを高める必要がある。モチベーションの高さを維持するには、常に目的（原点）に戻り、整理する（振り返る）機会が必要であろう。私の場合、学部で「保健医療情報」を担当するうちに、大学院の「保健看護情報」という展開の機会が与えられた。ICT（Information and Communication Technology）時代に不可欠という説明だけでは不十分と考えていたところ、「看護情報学は、患者、看護者およびその他のケア提供者がそれぞれの役割やさまざまな状況の中での的確に意思決定を行えるように、看護のデータ、情報および知識の統合を促す（American Nurses Association, 2001）」と教科書の定義が改訂された。この“統合から意思決定へ”の視点はなるほどと理解・納得できるものであった。

実践と教育の混同という点で、大学人はいろいろな衣を着せられやすいことに気づかされる。例えば、非常勤講師、各種の委員、アドバイザーなどを引き受ける機会が多いが、そこは一方的な講義、会議のための会議で生産的ではなく、やりっぱなしという時間消費の場と化す場合がある。私の場合、時機を逸せず、先輩の忠告「それはお前がやる仕事なのか」があったが、その時はどうも気づいていなかった。一年は一年、一日は一日、一人ひとりの時間は公平であるが、過ごし方はあくまで自己決定なのである。いまさらながら、流されているかどうかの自覚を意識すべきである。組織の一員としてこれらの位置づけが大切であろう。

教育と研究の同一視も起きやすい。本学の卒業研究（必修）では、研究の計画から実施、さらには解析と論文作成までを、学生が自ら挑戦している。教員は卒業研究の全ての過程を支援すべきであり、学生のニーズに適切に応えるには、コミュ

ニケーション能力が必要である。例えば、意欲も動機も多様な学生を対象とした課題は「傾聴」のように思われる。傾聴とは、聞き手が話し手の言葉、態度、顔の表情、声などのすべての表現を全身で感知し、相手の感情や思考の流れに沿って話を聞くことで、「聴く」には、意識して、努力して、相手の話を聞こうとする積極的な姿勢、沈黙さえも積極的に共有する姿勢が含まれているらしい。忙しい（と思い込んでいる）私は、学生の話をもじっくり聞かずに、即座に解決策を提示し、“時間の節約”を繰り返していた。このような指導のあり方は、能動的な学生を指示待ち的にし、結果的には教員と学生の双方の時間を失わせる可能性が高い。つまり、学生の意思決定を支えず、父権的な関係性に陥りやすく、時には半強制的という結果を招くのであろう。私の場合、幸いにも自発的で自律的な卒論生に恵まれ、傾聴という課題に気づくことができた。

ケースメソッドという参加型学習方法の一つがあるが、学習者から当事者意識を引き出すにはファシリテーターが重要な役目を担っている。このファシリテーターに必要な能力が傾聴である。保健看護の実践現場は、ケースメソッドの素材、特にジレンマの宝庫であり、「advocacy（代弁）」「empowerment（能力付与）」「mediation（調停）」などのキーワードに落とし込む世界が広がっている。このためか、「保健看護情報」の一つの柱と位置づけて、

私自身が取り組む姿勢が自然に出てきた。その過程で気づかされたことは、質的研究の分析道具は研究者自身—これに共通するかのように、ファシリテーターは存在そのものが支援という現実であった。よいファシリテーションが学びの場の形成には必要であるが、一朝一夕にはならず、である。かつて中江藤樹は、日常生活において、五事を正す（ごじをただす）ことの重要性を説いた。すなわち、貌（なごやかな顔つきをし）、言（思いやりのある言葉で話しかけ）、視（澄んだ目でものごとを見つめ）、聴（耳を傾けて人の話を聴き）、思（まごころをこめて相手のことを思う）で、これらが良知（誰でももっている美しい心）をみがき、良知にいたる大切な道であると教えた。日頃から五事を正すという自己研鑽の延長にファシリテーションがあるように私には思えるのである。

沖縄の文化的枠組みの中には、意思決定を支える風土（自然のファシリテーション）がまだ残っていると思われる。むしろ残っていたと過去形にしたいくない気持ちが強い。このことを十分に意識しながら、一大学人として、組織の教育、研究および実践の統合に向けて、本学の成長・発達の一隅を照らし、また将来に渡って、保健看護の構造、過程および成果が日本民族衛生学会と緊密に関係して継続発展することを促進していきたいと考えている。